

1. 単元名 届けよう、「服のチカラ」プロジェクト（副教材「いのちの持ち物けんさ」を含む）

2. 単元目標

- ・ファーストリテイリング社の講演を聞き、難民や世界における難民の現状について知る。また、「服のチカラ」について、衣類が私たちの生活とどのように関わり、役に立っているかについて知る。
(知識・技能)
- ・人権学習（国際理解）「いのちの持ち物けんさ」において、難民や世界の現状についての理解を深めると同時に、ワークショップ「喪失の疑似体験」で世界の難民がおかれている過酷な状況に思いをはせ、自分たちにできることを考えることができる。
(思考・判断・表現)
- ・世界で起きている問題に対して、自分たちの身近なところからできることを考え、それを実現できるように仲間と協働で計画を立て行動することができる。
(主体的に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

本校は令和4年度から「スクール ESD くさつプロジェクト」の研究指定校になり、継続的に「持続可能な開発のための教育」（以下、ESD）に取り組んできた。今年度は「ESD を軸にした生徒の主体性と問題解決能力の育成～地域との協働学習を通して新たな価値を創造する～」をテーマに、本校の ESD の取組意を「G-GRIT（Gaining for Globalization of Respect, Identity and Thought）学習」と称して、「松原未来学習」と「松原ローカル学習」の2本軸で、3年間系統のかつ連続性のある学習を推進している。G-GRIT 学習において本単元は「世界に目を向けジブンゴトとして考え、行動する」をテーマとした「松原未来学習」に位置付けてある。Think Globally, Act locally.の精神で本単元に取組み、SDGs の達成に貢献できる態度を期待する。

(2) 生徒観

2年生は1年生のときから G-GRIT 学習に取り組み、SDGs の知識を積み重ね、地元の野菜ブランドである「ベジクサ」について知り、その魅力を地域に向けて発信し、地産地消の推進が環境負荷低減につながることを伝えてきた。また、フードロス問題について学習し、普段食べている給食の残食をなくすための案を考え、それらを市に提言した。これらの取組を行ってきた本学年の生徒はアンケートで「SDGs について知っている」、「地球規模の具体的な課題があることを知っている」などの質問に高い割合で肯定的な回答をしている一方で、「日常生活で SDGs の目標達成を意識している」という質問に肯定的に解答した生徒は過半数に満たなかった。知識があるにも関わらず行動に移すことができていないという現状の背景には、問題の大きさと自分たちの力の乖離を感じているのではないかと考えられる。本単元では身近なところで起こした行動が世界の問題に貢献できたという自己効力感を感じさせ、様々な課題に対して立ち向かう力をつけさせたい。

(3) 指導観

本単元では難民支援のために不要となった子ども服を集めるプロジェクトを実施する。その方法としては、地域の小学校やこども園、保育園等、さまざまな施設にポスターや回収ボックスを設置する方法がまず考えられるが、方法を考えるところから、設置の依頼交渉、集まった服の回収等にいたるまで生徒にゆだねて(教師が手を貸さない)進めていく。これは生徒が仲間(チーム)とコミュニケーションをとりながら主体的に進められるようにするための仕掛けであり、問題や目的に対しての理解を深めることやプレゼンテーション力の向上も期待できるため安全面には配慮した上でこの姿勢を貫きたい。また、オーソドックスな回収方法にとどまらず、自由な発想で取り組むことができるよう教師側の懐を広く構えたい。

(4) ESD との関連

・本学習ではたらかせる ESD の視点 (見方・考え方)

相互性: 豊かな暮らしをする私たちの一方で、過酷な環境で生活をする人々が世界にはいることを知る。

連帯性: 自分たちが仲間と協力して行動を起こすことで、地域を巻き込み世界の大きな問題に貢献することができる。

責任性: 仲間と協力するなかで一人ひとりが自分の役割を認識し、責任をもってやり遂げようとする。

・本学習で育てたい ESD の資質・能力

未来像を予想して計画を立てる力:

子ども服を集めることが難民支援につながる。

コミュニケーションを行う力:

仲間と意見や考えを出し合うこと、回収ボックスの設置交渉等で地域の方にプレゼンを行うことで考えや思いをまとめて伝える力を養う。

他者と協力する態度:

目的の達成のために仲間と協力が不可欠なプロジェクトである。

つながりを尊重する態度:

学級や学年など、同世代間の横方向のつながりだけでなく、地域に広く呼びかけることで世代を超えた縦方向のつながりも感じることができる。

・本学習で変容を促す ESD の価値観

世代間の公正を意識できる:

世界が抱えている難民問題とその背景を知り、世界平和に向けて考える機会とする。

幸福感に敏感になる、幸福感を重視する:

他国の現状を知ること自分たちの恵まれた環境について感じることができ、世界の課題の解決に向けて取り組むことができる。

・達成が期待できる SDGs

1 貧困をなくそう 3 すべての人に健康と福祉を 10 人や国の不平等をなくそう

11 住み続けられるまちづくりを 12 つくる責任 使う責任 16 平和と構成をすべての人に

4. 単元の評価規準

ア知識・技能	イ思考力・判断力・表現力	ウ主体的に学習に取り組む態度
<p>①世界における難民や難民キャンプの実情、服のチカラについて学び、伝えようとしている。</p> <p>②世界の難民の実情を知り、自分のできることを考えようとしている。</p>	<p>①喪失の疑似体験を通して、難民の実情をジブンゴトとしてとらえ考えを深めている。</p> <p>②子ども服を集めるために、自分たちにできることを考え、実施するために計画を立てたり、計画を形にしようとしたりしている。</p>	<p>①難民や難民キャンプ、服のチカラについて知り、課題解決に向けてジブンゴトとしてとらえ行動しようとしている。</p> <p>②単元の振り返りを通して、課題解決に向けて行動を起こす態度をこれからの生活に活かそうとしている。</p>

5・単元の指導計画（全11時間）

次	学習内容	学習への支援	評価
1	“届けよう、服のチカラ”プロジェクトについて知る ファーストリテイリング社の講師を招き、プロジェクトの概要を知る。	生活に欠かせない服の役割（服のチカラ）と難民、世界の難民キャンプの実情について理解を深める。	ア① ウ①
2、3	子ども服を集めるための方法を考える。 学級の中でグループに分かれてアイデアを出し合う グループで出したアイデアを発表し、共有する	アイデアをまとめるためにKJ法などの手法を活用させる（ふせん、タブレット） 実現可能かどうか、実現するにはどのような準備が必要か適宜アドバイスを行う。（やりすぎない）	ア② イ②
4、5	人権学習(国際理解) 「いのちの持ち物けんさ」 ※指導の詳細は別紙指導案あり		ア① イ①
6～8	アイデアを実行する 学級でまとめたアイデアの実施に向けて準備を進める。 ・ポスターや回収箱などの制作 ・設置する施設の検討 ・設置交渉のためのプレゼン作成など	制作に必要な材料や道具の調達を必要に応じて支援する。 生徒が主体となって取り組むことができるよう進めていく。 全員が何らかの役割をもって取り組めるよう調整を行う	ア① イ② ウ①
時間外	（6～8次と並行して） ・回収箱設置の交渉・設置・運用 ・地域等への呼びかけ	安全面に配慮しながら、活動をサポートする。 （特に服の回収は量が多いと生徒だけでは困難）	ウ①
9～11	集めた服を難民キャンプへ送るため梱包する。	学年全体で体育館を使って3時間続けて実施する。	ウ①

	<ul style="list-style-type: none"> ・作業の流れや役割分担は代表者が教室で各学級に説明する。 ・体育館に移動し、確認した役割分担や流れのもと梱包の作業を開始する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・代表者にはあらかじめ流れを説明しておき当日はリーダーとなって生徒に指示をする。 ・指定された区分ごとに仕分けを行うが、その仕分けの際に集まった服を体育館全体に並べ、記念撮影を行う。 	
事後	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートを実施し、取組の振り返りを行う。 ・ファーストリテイリング社から届けられるプロジェクトのレポートを見る。(3月頃) 	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートの結果は分析後、生徒にフィードバックし、自己有用感の向上につなげる。 ・日本全体でどれだけの子ども服が集まったのか、どこの難民キャンプに届いたのか、届けたときの様子などが届く予定。 	ウ②